

# 令和5年度 第1回飯田市総合教育会議会議録

日 時 令和5年 8月 2日

午前10時00分開会

場 所 飯田市役所 A301-302号会議室

---

## 1 開 会

○林企画部長

ただいまから、令和5年度第1回飯田市総合教育会議を開催させていただきます。

本日司会を務めさせていただきます、企画部の林と申します。よろしくお願いいたします。

---

## 2 あいさつ

○林企画部長

それではごあいさつをいただきたいと思います。

まず、佐藤市長、お願いいたします。

○佐藤市長

おはようございます。

明日から人形劇フェスタという大変忙しい時期に、今年度1回目の総合教育会議にお集まりいただきありがとうございます。

私としては、ついこの間、「読解力」について皆さんと意見交換をしたような思いでおりましたが、今年度1回目の総合教育会議になりました。

今日のテーマである「インクルーシブ教育」は、私がいろいろな場面で市民の皆さん、保護者の皆さんとお話する中で、「個に寄り添った」という言葉で表現される今の状況、例えば、就学判断、特別支援学級について「自分の子どもの状況に応じてやっていただけることはとてもありがたい」という保護者の方もいれば、「レッテルを貼られることが非常に苦痛である」とか、「できればみんなと一緒に学級に通いたいんだ」というお話をされる保護者の方もいらっしゃるって、どちらの保護者のお話も皆さんの思いとしては、そうなんだろうと受け止めるところがあり、そういったものが現場ではどうなのか、ぜひ一緒に共有したいのの一つ。

それから、今の時代の中では、「多様性」が1つのキーワードになります。地方の公立学校

は、多様性が、ある程度確保されていると私は受け止めています。例えば、都会の私立の受験を経て「良い学校」って言われている学校に入るとは、結果として偏差値で切り分けられたある特定の集団になってしまって、多様性を確保するのはとても難しいのではないかと想像しますが、それに対して、地方の公立学校は、保護者の職業、住んでいる地域、いろいろな背景を持った子どもたちが集まるという意味では多様性が非常に確保されています。その中で、例えば障がいのある子がクラスの中に一人いるのが、周囲の子どもたちの優しい気持ちや行動を引き出すような面も私自身の経験からもあって、そういう意味では多様性の中にインクルーシブ教育も一つの切り口としてあるとも思います。今回のテーマは私がこれまで市民の皆さんと接する中での思い、あるいは自分の経験の中での思いがありますが、一言で「インクルーシブ教育」、「寄り添った教育」といっても非常に幅が広いと思いますから、今日はぜひ教育現場の実態をお聞かせいただきながら、状況を共有して一緒に考える機会になったらと思いますテーマに設定させていただきました。

教育委員の皆さんが、日頃感じておられることや、現場で見てこられたことでお気づきの点などを出していただきながら、状況の共有と今後の取組のあり方について、意見交換できればと思っていますので、よろしく願いいたします。

#### ○林企画部長

ありがとうございました。

続きまして、熊谷教育長からごあいさつをお願いいたします。

#### ○熊谷教育長

改めまして、おはようございます。お集りいただき、ありがとうございます。

以前は「特別支援教育」を「特殊教育」と言っていた時代がありました。長野県では「はじめに子どもありき」という言葉を大事にして、一人一人の状態に合った教育を大事にすることがずっと叫ばれてきましたが、その中で共生社会、インクルーシブ教育システム等の言葉が出てきて、障がいのある子どもたちも、そうでない子どもたちも、一緒に学ぶことがとても大事だという流れに世の中が大きく変わってきたと思っております。

そういう中で、長野県は「一人一人を大事に」と考え、個に合った指導をしたい部分とみんなと一緒に学ばせたい部分が、本当はうまく相容れれば一番良いのですが、例えば、集団が苦手な子どもや大きな音が苦手な子どもたちが無理に集団の中に入るのは、パニックや二次障がいが起こるといった現実の難しさもあります。「個に寄り添った誰ひとり取り残さない教育」という理想に向けて、誰しもがそこに向かって行きたいと思っているが、現実問題としてそういう課題もあると感じております。

市長が申されたように、私もキーワードの一つは「多様性」という言葉であり、もう一つは「ウェルビーイング」という言葉であると考えています。一人一人がウェルビーイングな状態になれることが、とても大事だと最近言われています。

全ての子どもたちが障がいのあるなしに関わらず、共に学ぶ関係づくりについて、それぞれのお立場からご意見をいただき、まず当市の教育状況を共有しながら、今後の方向を見い出せたら良いと思います。学校現場から毎年「支援員を増やしてほしい」という要望が来ています。それに対応して一人ずつ増やしてはいますが、なかなか対応しきれてないという現状もありますので、そんなことも含めて検討していけたらと思っております。

今日はよろしく願いいたします。

○林企画部長

ありがとうございました。

---

### 3 意見交換

個に寄り添った誰ひとり取り残さない教育の実現に向けて

～飯田市が目指す「連続した学びの場」の充実とインクルーシブな教育の共有～

○林企画部長

それでは早速、意見交換に移らせていただきたいと思います。

今回のテーマは、「個に寄り添った誰ひとり取り残さない教育の実現に向けて ～飯田市が目指す『連続した学びの場』の充実とインクルーシブな教育の共有～」となります。

意見交換の進め方ですが、大きく論点を2つに分けて進めてまいりたいと思います。

1つ目の論点のポイントは、「個に寄り添った誰ひとり取り残さない取組の実現に向けて」の問題意識、課題認識についてご意見をいただければと考えております。

2つ目の論点のポイントは、目指す姿・望ましいあり方に加えまして、当面取り組むべき課題等について意見交換をお願いできればと考えております。

1つ目の意見交換の前に、教育委員会が資料を用意しておりますので、説明をさせていただき、それを受け、一旦、市長、教育長からご意見をいただき、その後、教育委員の皆様から自由にご発言を頂戴したいと思います。

それでは説明に入らせていただきたいと思います。教育委員会からお願いいたします。

○麦島係長

教育支援係の麦島です、よろしく申し上げます。

資料に沿って説明させていただきます。2ページは特別支援教育の対象者の現状です。当市の義務教育段階における特別支援教育の対象者の概念図となっております。児童生徒数が減少する中で、連続する多様な学びの場において、特別支援学級の在籍率は5.6%、通級による指導の利用率が2.8%となっております、平成28年度に比べるとおよそ2倍となっております。また、全国や長野県に比べても、高い状況にあります。

3ページは、「通常の学級に在籍する児童生徒への支援について」です。小学校・中学校ともに、通常の学級において発達障がい診断を受けている子どもが一定数おり、その中でも自閉症スペクトラム障害の児童、生徒が多く生活しております。また、発達障がいの診断はありませんが、担任や複数の教員により特別な支援が必要であるとする児童、生徒も一定数存在しております。全国的には8.8%いるとの報告があり、当市でも同程度の状況であると考えております。発達障がいによる特性によって、特別な支援や配慮が必要となつてまいります。その例を表に掲載しておりますが、その子の特性には違いや重複等もございますので、支援や配慮については、個に応じた対応しているところです。障がいについては、教員が診断できるものではありませんので、保護者の障がいの受容の面で難しいケースもいくつかあります。通常学級の先生を含めて、全ての先生方に対して特別支援教育の芽を育てていくことが大切と考えており、研修を年4回計画しておりますが、まだまだ通常学級の先生方の参加が少ないのが現状です。

4ページは主な取組と課題です。主な取組として、全ての先生を対象とした特別支援教育に関わる研修会を年4回実施しております。また、昨年度から今年度にかけて、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所インクルーシブ教育システム推進センターの地域支援事業に参画し、「通常学級における特別支援教育の推進」をテーマに取り組んでおります。ほかには、県の取組である授業のユニバーサルデザイン化や授業がもっとよくなる3観点（市でいえば「結いプラン」）の推進、また、個別の教育支援計画を市内で共通様式とし、利活用をお願いしております。

課題としては、特別支援学級の就学判断がなされても、通常学級で生活をせざるを得ない状況の学校もあり、適切な教育的支援に至らない場合もあるということ。また、研修会を全ての先生を対象としておりますが、通常学級の先生方に参加してもらうことの難しさや、適切な支援につなげていくためのアセスメントや検査の手段に乏しいという課題があります。

5ページは通級指導教室についてまとめております。国の基礎定数化に向けた段階的な実施により、当市でも通級指導教室やサテライト教室が増えてまいりました。この設置に伴い、利用する児童や生徒も増加しています。

6 ページは主な取組になります。LD等の通級指導教室は、特別支援教育関係のアプリが充実しているタブレットを整備しております。本人の自立活動につながるアプリ等を活用しながら指導をしていただいている状況です。

個に応じて活動が異なりますが、「多層指導モデルMIM」と「マルチメディアダイジェー教科書」の2つを例として掲載しておりますので、イメージいただければと思います。

課題としては、通級指導教室を担当する先生にかかる負担が大きいことがあります。また、自校に通級指導教室がない場合に、他校の通級指導教室に通う（他校通級）対応をとっている児童、生徒がおりますが、その場合には保護者に送迎をお願いしており、交通費等の課題があります。また、授業時間に行くと、送り迎え等の時間も割きますので、日中に行うことが難しいといった課題もあります。

ほかには、通級を利用すれば子どもの困難さが治るということではなく、通常学級において通級の学びを生かした指導が必要となりますので、通級の担当の先生と通常学級の担任の先生との連携が非常に重要となりますが、通常学級の担任の先生の意識については、まだまだ課題があると感じております。

7 ページは特別支援学級についてになります。先ほど当市の特別支援学級の在籍率が高くなっていると説明しましたが、特に、中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級の在籍率が近年高くなってきているのが現状となっております。

8 ページは主な取組と課題になります。主な取組としては、特別支援学級では必ず行わなければならない自立活動の充実をお願いしています。自立活動は6区分 27 項目あり、その内容と例を掲載しましたので、ご覧いただければと思います。

課題としては、個々の子どもへの有効な支援策を知るために、医療との連携が大切であること。また、特別支援学級の在籍でありながら、様々な理由から通常学級で生活を主とし、本人の学び自体が充実していないケースもあります。先生方の特別支援教育に関するスキルアップも重要と考えています。

9 ページは副学籍についてまとめております。インクルーシブな教育としては、非常に重要な取組と考えておりますが、令和3年度には当市に居住する養護学校に在籍する全ての児童、生徒に、地域の学校に副学籍を持つよう制度を見直しております。希望に応じて交流及び共同学習を行っています。状況については、グラフをご覧ください。保護者や本人の希望によって交流が行われるため、実施率や希望率に変動がありますが、副学籍については担当の先生にとっては当たり前の状況になりつつありますので、今後さらに交流していない先生や、PTA・保護者の方への理解を広げていきたいと考えております。

10 ページは、就学相談・就学判断の状況を掲載しております。ここ数年は合計で 150 件を超える就学相談件数となっております。

11 ページは、昨年度、子ども家庭支援センター箕和前所長が調べました平成 25 年度生まれの子を追ったコホートと就学相談の流れの一部を掲載しております。年中で支援ニーズがあるとみなされた 120 名のうち実際には約半分しか就学相談にかからず、就学相談にかからなかった児童が入学後に学びの場の見直しが行われるケースがあります。幼児期から学齢期にかけての一貫した発達の見守りの必要性、また、通常学級における配慮や支援の重要性を示している資料と感じております。

12 ページは課題になります。就学判断と異なる就学対応をしているケースが様々あります。現場の先生が苦慮しながら対応していますが、適切な支援や指導につなぐことが難しい状況も見られます。また、発達障がいのある子が、通常学級で生活している場合の懸念として、不適応が生じたり、その後不登校へとつながることも考えられます。二次障がいを未然に防ぐ方策についても検討が必要であると考えております。

13 ページは特別支援教育の支援員の状況についてまとめております。学校現場からは、例年 70 名ほどの配置希望をいただいておりますが、現在 48 名の支援員を配置し、それぞれの学校でご尽力いただいております。現在の支援員の支援体制は、特別支援学級の子どもを中心とした活用となっております。通常学級にも特別な支援を必要とする子どもが一定数生活しておりますので、支援員の柔軟な支援体制の構築が必要と考えています。

以上、当市の特別支援教育に関わる現状・取組・課題をまとめさせていただきました。よろしく願いいたします。

#### ○林企画部長

それでは、1 回目の意見交換ということで、問題意識・課題認識等を中心に意見交換をお願いいたします。

まず、市長、教育長から意見をいただき、その後、教育委員から自由にご意見をいただきたいと考えております。

市長から発言をお願いいたします。

#### ○佐藤市長

自分の子どもを就学判断で特別支援を要する子どもだと判断されたことが良かったと受け止めている保護者もいれば、そこで区別されたことが心労につながっている保護者もいます。先ほど保護者の認識との齟齬があつてうまくいってないところもあるという趣旨の話もありましたが、学校現場で保護者との関係でそういう子どもを巡ってのやり取りの齟齬は起

こっていないのか。

「個に寄り添った教育」と「インクルーシブ」という言葉。両方の関係について、学校現場としてどういう理解をしてアプローチしているのかを少し噛み砕いてお話いただけるとありがたいです。

○林企画部長

事務局、お願いいたします。

○麦島係長

保護者との関係は、担任の先生を含めて管理職の先生等で支援会議を行い、日常的にも関係を築いてくださっています。教員は診断ができないので、子どもの対応を考えて適切な支援を行っています。保護者からは、いろんな要望が学校に対してありますが、その要望に応えられない部分も学校現場ではあります。特に通常学級だと、集団生活の中で支援が難しい状況も出てまいりますので、うまくいかない部分があると感じております。

「インクルーシブな教育」と「個に寄り添った教育」については、インクルーシブと一緒に学ぶことを目指してはいきますが、発達特性のある子が一緒に集団で学ぶことによって、いきなりパニックになるなど、対応を必要とすることもありますので、まずはそれぞれの学びの場で充実を図りながら、落ち着いた状態でみんなと一緒に生活することが大事だと感じています。

○佐藤市長

教室の秩序とインクルーシブ教育との間に何かがあるような気がしています。インクルーシブ教育は、均質な集団ではない中で、先生と子どもの対面関係だけではなく、周りとの関係の中で学ぶことであり、必ずしも落ち着いて静かな教室という環境だけではないのではないかと。そういうことも含めて、いろんな出来事が共に学ぶ機会を与えるのではないかと。目指すところが落ち着いて先生の話聞ける環境だけではないのではないかと私自身は思っています。それは学校現場で実際に教鞭を執っている先生たちの感覚とちょっと違うということなのでしょうか。

○林企画部長

ありがとうございました。

続きまして、教育長お願いいたします。

○熊谷教育長

今の市長のおっしゃったことと関連していますが、私も就学判断については2つのパターンがあって、状況を見て先生方が保護者の方に相談すると保護者の方がそれを受け止めて、

就学判断に行ったりお医者さんに診ていただくことを進める方とそうでない方がいます。現実的には、後者の方が数的には少ないと思います。一方で、お医者さんに診てもらうのに何カ月待ちという現状も課題としてあります。

市長がおっしゃるように、教室の秩序は今まで大事にされてきました。みんなが落ち着いて学べる環境を保ちたいという意識が教員の中でも強いと思っていますが、現実問題として、発達障がいなどで集団が苦手な子がパニックになったり、子ども同士がトラブルになり、その子どもたちの対応をしなければいけない状況が生まれた場合、本体の人数の多い子どもたちを放ったらかしにして良いのかとなり、それが繰り返されると、今度は通常学級の子どもたちやその保護者の皆さんが非常に不満を抱き始めることとなります。支援員や教頭先生に対応をお願いするという現実の状況はあります。静かな秩序ある教室が理想なのかもしれませんが、現実問題としてはなかなか難しいと思います。また、保護者は、高校に進学できるのか非常に心配をされていて、小学校の時から「中学校で特別支援学級に行くのは良いんだけど、その後の進路はどうなるの」と気にされる方も多々いらっしゃいますし、その割合は非常に高い状況です。中学校で割合が高いのは、高校へ行く準備が特別支援学級でできるのか、逆に特別支援学級で個別に指導してもらって学力を高めてほしいというニーズも感じています。課題としてはいくつもの現実問題もありますし、教育委員の皆さん方も、学校の様子を見ていただく中で、見聞きしたことや現実として感じておられることをおっしゃっていただければと思っています。

#### ○林企画部長

ありがとうございました。

それでは、教育委員から自由にご発言をいただきたいと思います。

市長、教育長は、教育委員のご意見を受けて、適宜ご発言をいただければと思います。

それではご発言のある方、挙手をお願いいたします。

上河内委員、お願いいたします。

#### ○上河内教育委員

子どもがおり、小・中学校とお世話になってきました。先ほど市長がおっしゃったように、教室の秩序というところで、教室が荒れた時に、先生が、私の子どもに心理検査のようなテストをしたことがあります。それは障がいを疑ってとのことだったと思いますが、結果は医療につながることもなく、このままでいこうということになり、今就職する段階になっております。

市長がおっしゃったように、親の中で抵抗があるというのは、私も経験して分かります。

「自分の子どもっておかしいのかな」と思われたことが、今でも心の中に引っかかってしまうところもあるということです。先生に悪気があったわけではなく、混乱した教室の中でどうしたら良いか分からなかったんだと思います。お互いの信頼関係をコミュニケーションなどで取り合うことが大切だと思います。

就学判断は子どものためです。例えば、無理解の中で傷ついて二次障がいを起こすことはあってはなりません。その子を中心に置いて、その子がより良い環境で、発達に行けるだろうかと考えていただけるものだと思いますので、そのように保護者も捉えて、信頼を持って受け止めていければ良いと考えております。

いろいろな学級を経験してきましたが、「地方の公立小学校は多様性が担保されているのではないか」とおっしゃったように、本当にいろんな子どもたちの中で育つことができたと思っています。外国籍の子、すぐ歩き回りたくなるような子、それをサポートするような子もいました。ほかのクラスには、障がいのある子、病気を持っている子などがいました。日本語教室でサポートを受けたり、支援の先生が入ってくれたり、先生が子どもたちに話をし協力を求めたりして、良いかたちで子どもたちは自然に仲間として受け入れていると思っていました。それが今日の資料にもある当市の特別支援教育の手厚さにつながっていると思っています。

ただ、重度の障がいのあるお子さんとの交流がいっぱいあるとは言えないと思います。私の住む地域にはお子さんが車椅子の生活をしていらっしゃるご家庭があり、養護学校に通われています。私は同じ世代でしたが、一度もお会いしたことがありませんでした。一度だけ「秋祭りにお神輿を見たい」と言って外に出ていらっしゃるのを見て、「こんな近くに障がいのある子どもを育てている方々がいたんだ」と初めて気づきました。それまで聞いてはいましたが、思いを寄せることができなかつたなと思いました。いろいろな機会に知ることがとても大切だと感じました。私たちは多様性と言いますが、割と自分の判断ばかりに囚われているのではないのでしょうか。公民館大会で中国引上げ家庭に育った先生のお話を聞いたこともありますし、小学校の親子講演会でLGBTQの方のお話を聞くこともありました。そういった機会に「ああ、私たち大人もなんて知らないんだろう。なんて知ることを見ずに来たんだろう」と反省しました。多様性のある子ども、人々がいることを知る機会が大事であり、私たち大人が知っていくこと、その上で子どもたちにもいろいろな交流の機会を設けてもらい、一人一人が想像を働かせることができる教育をしていけることを私は一市民として願っています。

○林企画部長

ありがとうございました。

それでは、ほかにご発言がございましたらお願いします。

野澤委員、お願いします。

○野澤教育委員

私自身子どもがいないので、実際に経験しているわけではありませんが、いろいろ勉強させていただく中で、これからの課題や問題という点で考えたときに、今、社会が成熟している中で、晩婚化しているのが一つの要因。特に自閉症スペクトラム障害、AD/HD注意欠陥多動性障害はかなり解明されてきていて、染色体異常という話が学術的には出てきています。女性と男性だと、XXの染色体が女性、XYが男性としたときに、Xの染色体に異常があるのが通例としてあります。その発症率で考えると女性よりも男性の方が2倍多いと言われています。簡単にそんな話が出ている中で、晩婚化していることは、要は男性の機能がミスコピーされることで、病気が発現するという話になっています。だから全体的に社会の問題として取り上げていかないといけない。先ほど教育長が「保護者が高校の進路の心配をされる」とおっしゃっていたが、本当はその先の生きていけるかどうかの心配をしていると思います。社会がそういうものをきちっとしっかり見て、本当にインクルーシブな社会をつかっていかなければならない。どれだけ自分たちが実生活の中でこういう方々と接して、どういう生活をしているかをもう一度振り返って、暮らしの中できちんとその部分をいろんな人たちが体験的な部分で実感をし、それを教育の現場に反映させていかないと。ただ教育の現場だけでいろんなことを考えていくだけでは、よくないような気がします。実際に私どもの会社で、今まで何人ものそういう方が入ってきて、どうしても適応できなくて抜けていってしまうことが多いんですけども、やり始めると非常に集中力を示す子もいるし、全然できない子もいる。良いように見ればすごく集中して仕事ができるすごいと見る場合もありますが、その裏返しではコミュニケーション能力がないという表裏がどうしてもあるので、周りが分かってサポートしてあげることができると、会社の中でかなりの時間しっかり働くことができます。社会全体がそういう雰囲気にならないと。親御さんは「どうなるんだろう」と本当に心配だと思います。でも、それはなぜ心配かという、社会にそういう受け皿がないからだと思います。そこをどうにかしてあげることで、不安が治まる可能性はあると自分は考えています。なので、課題や問題は、教育の中だけではなく、社会としてどうやっていくんだというところをもう一度みんなで考えていかないといけないと自分は考えとして持っています。

○林企画部長

ありがとうございました。

三浦委員、お願いいたします。

○三浦教育委員

教育委員になり学校訪問をさせていただく中で、特別支援学級の子どもの先生の授業でも先生方が分かりやすい授業をされ、本当に生き生き元気な笑顔を見せていただきました。通常の教室にいる支援が必要な子どもさんに支援員の先生方がついて、その教室で学ぶことができる姿を見させていただきましたが、今、様々な資料でご報告いただき、こんなにたくさんの課題があったと改めて気づきました。実際には、様々な子どもさんの笑顔を見てきました。収穫した野菜を誇らしげに見せてくれた子や、飛び出して行った子を慌てて先生が追いかけて、子どもさんと2人で歩いて戻って来られる姿を見て、そういったところが学校の中で日常になっているのだと感じております。

特別支援の関係の専門家である信州大学の本田秀夫先生の著書の中に「コンピテンス・モチベーション」という言葉がありました。「できる」というモチベーション。子どもたちが何にわくわくして楽しくなるのか、発達の各段階で子どもたちには、できなかったことができるようになるという経験が必要です。障がいがあるうがなかろうが皆同じことで、できるようにすることが、教育の根幹であり、必要なことだと思っています。

先ほども市長から「レッテルを貼られる」ということを話される親御さんの話がありました。確かにレッテルかもしれませんが、でも長い目で見たら、その特性を見つけることによって、「できる」ことが経験できる、一つのきっかけを見つけることができると考えれば、その時点で保護者の皆さんの理解が得られなくても、子どもさんが変化していくのを見たときに、「あ、良かったんだ」と思えると思います。そこが大事だと考えます。変に保護者が壁になってしまって、その子ができることがあったにも関わらずできなかったということがあってはならない、そこを見つけていくことが、就学判断の本来の意味合いであり、レッテルではなく、子どもさんの笑顔、自信、それがまた生きる力につながっていく、そういうことを経験させてあげることのできるものになってくれば良いと思います。

通常の教室で支援員の方とともに勉強をしている子どもさんがパニックになった現場を見たことがありました。机をいきなり蹴飛ばし、勉強している周りの女の子がビクッとするような感じで私も驚きました。でも、何ごともなかったように授業が進められていました。その子だけのことではなく、周りの子が怯えながら学習をしなければいけない環境は果たして良いのだろうかと思いましたし、その一時を見ただけでは分かりませんが、その時に周り

の子どもさんたちも自分の思いが言えることが大事だと思いました。

話は変わりますが、飯田OIDE長姫高等学校の評議員をさせていただいておりまして、定時制の卒業式に出席する機会がありました。その時に大声で奇声を発した卒業生に、隣にいる同級生が優しく背中をさすところを見て、「インクルーシブってこういうことか」と思いました。一時では計れないものがあって、子どもたちが多様性の中で学ぶことは、そのときの善し悪しではなく、結局その生活の中で時間をかけて培われていくものだと、その卒業式のとくに思いました。

何が正解で何が正解じゃないのか分かりづらい課題であると思いますが、でも一番核として残しておきたいのは、できなかったことができるようになったという子どものモチベーション、「できた」時の笑顔を、常に教育者も保護者も見ても向かっていく必要があると感じています。

#### ○林企画部長

北澤教育長職務代理、お願いいたします。

#### ○北澤教育長職務代理者

今日は、学校教育の根幹に関わるテーマで意見交換ができるので、とてもありがたいと思っています。発達障がいがあるないということに関わらず、個別の対応が必要な子どもは、これから増えることはあっても減ることはないと思っています。発達に特性がある子どもたちに配慮した環境づくりは、ない子どもたちにとっても間違いなく学びやすい環境であると思います。先生方の集まりで必ずお伝えしている言葉があります。自分の経験から言うと、どうしても教員は、夢中で目の前の子どもと接するあまり、目の前の子どもの姿がずっとこの先も続いてしまうような思いになってしまいます。先生方にいつもお願いしているのは、今、目の前の姿だけで子どもたちを見切らないでほしい、目の前の子どもたちは本当に発達途中で、どんどん成長して変化していく存在だということを、教員はいつも心に留めていてほしいということです。今、三浦委員は、保護者のことも含めておっしゃいましたけれど、特に、日々子どもと接する教員は、そのことを心に留める必要があると思っています。心しとかからないといけないのは、発達障がいや特性があるという先入観を持つと、その子の可能性を狭めて見てしまうとか、その子に本来求めるべきものを、発達障がいの診断があることを盾にして求めないで通ってしまうようなことがあると思います。一番大事なことは、診断があるとかないとかということではなく、その子自身をよく見ることであり、その子の困りごとや悩みごとに寄り添う姿勢が大前提だと思います。そうした点で2点、お話をしておきたいと思います。

1点目は、通常学級に在籍する発達に特性がある子どもたちへの支援に関わって、日々、子どもたちは授業を受けているわけで、分かりやすい授業を提供するという観点にたつと、今日の資料の4ページの「イ主な取組」の(3)①で、当市が進めてきた「学力向上『結い』プラン」、県では「授業がもっとよくなる3観点」、当市の場合は、さらに当市の子どもたちに寄せて、自分の考えを持つ時間や書く場面も大事にすることを具体的にしましたものです。市内の小中学校の全教室、全授業で実施を呼びかけて、今年11年目になります。授業の流れを先に示す、この時間で取り組むべき課題を先に提示する、小学校でも中学校でも共通に板書の位置まで配慮することで、特性のある子どもたちにとっても授業の流れが分かるようになります。例えばノートを取らなきゃいけない時に、ここの位置の部分だけは確実に取ればある程度安心できる、大丈夫ということにも配慮されています。今年も教育長と全教室訪問させていただきましたが、ほぼ全ての教室で最低限の「結いプラン」を配慮した授業はされています。毎年ほぼ3分の1の先生方のご異動されてしまうので、今年できていたから来年もということにはならないので、年が変わっても繰り返し先生方には理解をお願いして、その必要性や有効性を分かってもらいながら、継続していくことはとても大事だと思っています。

もう1点、当市の特別支援学級の在籍率が9.2%と資料に記載されています。長野県自体の特別支援学級在籍率が全国と比べるとかなり高いと言われていますが、その高い長野県の数値と比べても当市の在籍率9.2%はかなり高く、全国でもトップクラスの在籍率ではないかと思っています。在籍をするには、就学判断はもとより、園や学校での生活の様子や、保護者の了解が必要なわけで、決して安易に在籍を進めているわけではないと思っています。それでもこういう結果になっているのは、ある意味、特別支援学級の支援が保護者をはじめ多くの方に理解されていることも一つあると思っています。そして当市の場合、保育園等の年中時の支援ニーズの把握から、早期の支援につなげようとしています。しかも学校だけではなく、子育て支援課や医療、市役所内外の関係部署の連携も図られながら進めてきている結果が、年中段階で必要だと見られても、実際、就学相談を受けられている方はその半分ぐらいただと状況の話もありましたが、そうではあっても、早期に「この子を心を砕きながら見てこうね」ということが共有されていることは、連続性のある多様な学びの場を提供していく点では、とても大事なポイントだと思っています。

今後に向けて改善していきたいことの1点は、とにかくその子の成長をしっかり見つめるということです。市長の「レットル」という話もありましたが、学校でありがちなのは、特別支援学級に在籍したら在籍したまま、低学年で入級したまま卒業までずっとそのまま措置替えもなくいつてしまう例が結構あります。その子が成長して何ができるようになって、何

に困難を感じているのかを丁寧に見極めて、場合によっては、ここまでは入級してきたけど、ここからは措置替えて原級に所属することがあっても良いと思っています。そのためには、学校の先生方がさらに研修を積んで専門性を身につけて、その子に合った指導をしながら、改善されてきたら原級に戻ることもいくらでもあることを、保護者との間できちっと共有していくことがとても大事だと思っています。入ったら入ったままとか、特別支援学級に行ったら特別支援学級にかなりの部分を任せてしまって、原級との関わりが薄くなってしまふことが起こってくると、どうしてもさっきのレットルの話にもなってしまう。9. 2%の子が在籍している状況から、そういう配慮は絶対欠かせないと思っています。そういう意味で、教員研修を企画するが、通常学級の先生が全員参加というわけにいかないと話がありました。各学校には、特別支援の専門性を持った先生が何人もいらっしゃるの、その先生方が積んでいった研修を学校に持ち帰って、伝達研修で良いので、そういうような機会を持つことを各学校ではぜひ配慮してほしいと思います。

○林企画部長

ありがとうございました。一通りご発言いただきました。

市長、教育長、発言があればお願いいたします。

○佐藤市長

ありがとうございました。今、4人の教育委員の皆さんの話をお聞きして、私の中でモヤモヤしているのがかなり晴れたような気がしています。最後の北澤委員のご発言がまさにそういうことだと思います。教室の落ち着いた状況を確認するために、その子を特別支援学級に行ってもらふことが、その一時の押しつけを確認するためにやっていることになってはいけないというのは、私が感じていた違和感だと思います。1度特別支援学級に入れたら継続するのではなく、ちゃんと一人一人を見て、通常学級に戻れば戻ってもらふし、すぐに戻れなくても通常学級との関係を切らさないようにしながら、その子が通常学級にも在籍していることが、周りの子どもにも良い影響を与え得ることだと確認できました。インクルーシブが理想像として、教育関係者の皆さんはお持ちだが、現場の状況は必ずしもそれを許さない状況にあるということも理解しました。人手が足りなかったり、先生方の負担が大きかったりということもあると思います。ではどうするかということが非常にこれから大事になると思いました。ありがとうございました。

○林企画部長

ありがとうございました。

熊谷教育長、お願いいたします。

## ○熊谷教育長

いくつか課題を明確に指摘していただいたと思います。1つは野澤委員から社会の問題だとおっしゃっていただいて、私も「高校のことを心配される保護者の方がいらっしゃって」という話をしましたが、専門家からすると特別支援学校へ行って、障がいのあるお子さんたちは療育手帳をもらった方が将来的には働く場所もきちんと可能性があって良いと考えて、その子に合った学校への進学を紹介しますが、保護者の方からは「働く場所は良いかもしれないけれど、結婚はできるのか」と言われます。その時に、これは社会の認識の難しい大きな壁だと感じ、その後どうすれば良いという言葉はなかなか出てこなかったということがあります。社会がどう受け止めるかは、先ほどのレットルも含めて、とても大きな課題だと感じました。

また、別の視点で、学級集団の中でその子にどういう居場所があるのかということで、三浦委員からは、背中をさすお子さんがいたとお話がありました。「五体不満足」という本に、障がいのある乙武さんの周りの子どもたちが同じように、乙武さんとの関係をつくったという話がありました。ある意味、そういうことが理想だと先ほどお話を聞いていて思いました。その子への支援と、周りの子どもたちがどういう教育を受けて、どういう理解をして、どういう考え方ができるかということは、パニックになったお子さんや大きな声を出すお子さんがいると、周りの子の集団によってはそのことが大きな問題になる場合もあるし、大した問題にならないこともあり得るということだと思います。学級集団づくりはとても大事なことで、その子にとってそういう理解ができる学級集団ができることは、北澤委員がおっしゃっていたように、どの子にとっても居心地の良い学級集団になるのではないかと感じました。

先生方も、本当に一生懸命やっていただいています。時に上河内委員がおっしゃったように、その子に障がいの疑いをもって見て、保護者の方にお話をした時に、先生はそういう目で見えていたのかという思いを受けるので、教員も非常に信頼関係を崩すことを恐れて、慎重にお話をされているケースは多いと思います。そういう話をした途端に、信頼関係が崩れることもあり、その辺のところは難しいところでもあります。コミュニケーションでお互いの思いが分かってくると、その問題も変わってくる可能性があると思いました。

北澤委員さんがおっしゃったように、子どもたちが成長して変化する。私もこれまでの中で、自閉症・情緒障害判断だったお子さんが中二・中三になった時に、ほとんど通常学級で生活ができるようになり、全く課題が見えない子は措置替えをした経験があります。やはり子どもは成長すると思います。ただ、それがなかなか現場で苦しんでいる方たちにとっては、先が見えないので、非常に不安でもあり、どうしたら良いかが課題となっていくことになる。

研修はとても大事だと改めて感じています。

○林企画部長

ありがとうございました。課題認識等につきまして、ご発言をいただきました。今のご発言を受けまして、何かご発言ありましたらお願いいたします。

○佐藤市長

今日は現場の先生がいないから分からないが、先ほど北澤委員がおっしゃった、一度特別支援にしてしまったら、それを盾にいろんなことをスルーしてしまう現状が現場ではあるのでしょうか。聞いたことがある話としては、「そういう子どもを早く判断してほしい。判断してもらえれば特別支援へ入るので、通常学級の秩序が保たれるという力が働いているんじゃないか。」という内容のことを言う方もいるわけですが、現場の実態はどうなのでしょう。

○北澤教育長職務代理者

かつては分からないが、少なくとも今はそういう認識の方はいないと思います。今の学校現場で特別支援教育の視点を持たないで学校経営や学級経営はできない状況です。先ほども「研修がさらに必要だ」という話はしていますが、かつてに比べたら先生方の特別支援に対する研修は、格段に充実してきています。この子がこっちへ行ったら学級の秩序が保たれるから、この子に支援学級を勧めるなんていうことはないと思います。

先ほど申し上げたのは、逆にその子自身の成長をきちっと見てほしいという意味で申し上げました。要するに、支援学級に所属したら、その子はそこでかなり安定します。安定してその少人数の中で個別に対応してもらって、極端な話その子があんまり嫌がるようなことは提供されないので、安定した生活ができていることを、つつい支援している側はそれで安心してしまい、その子にもっと求めれば何かその子にさらに変化が起こるかもしれないが、安定していることが一番は良いこととして、本来なら求めるべきものを求めない。だからこの子にこういう発達特性があるとか、こういう障がいの診断を受けているといったことが、先入観で心の中にあると、ついそこを手控えてしまうといったことが、もったいないんじゃないかという意味で申し上げました。教育長も言っていましたけれど、教育長と同じ学校で支援が必要な子たちを7年ぐらい一緒にやってきました。その子たちが今大学3年生、2年生ぐらいになっています。小学校4年生ぐらいから関わってきた子たちは、最初は親も大変でしたし、本人も4年生ぐらいでだんだん違和感が強く出てくるので大変でした。例えば、「うちの子は発達に特性があるので、皆さんにちょっと迷惑をかけてしまうかもしれないけれども、お願いします。」と親が保護者の皆さんにお願いをし、相互理解が進んだということもありました。その子の場合も、中学生の頃は、自閉症・情緒障害特別支援学級に籍を置き

ながら通常学級の授業を受けているので、自閉症・情緒障害特別支援学級へ抜けていく時は、本人が「行ってきます」と言うと、クラスみんなが「行ってらっしゃい」と言って、「ただいま」と戻ってくると「お帰り」と言って、クラスで受け止めていました。

先ほど、音の話がありましたが、中学へ入学したばかりの時に、必ず5分ぐらい遅れて教室へ来る子がいたので、中学の授業が嫌なのかと思って話を聞いたら、そうではなく、みんなが張り切った声で各授業の最初に「お願いします」という声がとても怖いということが分かりました。クラスに話をし、「お願いします」の声をしらず、授業の最初と終わりは全員が黙礼することにしたら、最初から授業に入れるようになりました。その子のクラスは、中学3年間全ての授業を黙礼というのを全校の先生方も共有していた。小さな話ですけど、でも、そういうことがインクルーシブの取っ掛かりになると思います。

例えば、追手町小の「ことばの教室」の先生が、通級してきているお子さんの学校へ行って、原級の子どもさんたちに、「Aちゃんはね。追手町小のことばの教室へ来たらこんな勉強しているんですよ」「こんなふうに頑張っているんだよ。こんなことがAちゃんが困ることなんだよ」というのを原級の子たちに話をしてくれたこともありました。そのことをクラスの子どもたちもとても理解をしてくれた、今もそれをやってくれています。

学校現場では細かい配慮を重ねて、子どもたちを育ててきている例はたくさんあると思います。

#### ○佐藤市長

逆にその子の特性、ある種天才肌みたいなどころがあるという話があります。例えば、トム・クルーズは文字が読めないけれども、聞けば台詞は全部分かるということですが。

#### ○野澤教育委員

そういう意味では、ダビンチもADHDであったと聞いたことがあります。

#### ○佐藤市長

特性を伸ばすアプローチまでできているのでしょうか。

#### ○北澤教育長職務代理者

中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級在籍率が5%は格段に高い状況で、そこに着目しています。国や県の基準では、自立活動を必ず実施し、週の半分以上は自閉症・情緒障害特別支援学級で生活をするという基準を設けています。当市の5%の中には、日常は可能な限り通常学級で生活をしながらも、心が疲れたときや人間関係が厳しくなったときに、自閉症・情緒障害特別支援学級で自分を取り戻せる、そういう居場所として確保しておきたいといった、保護者や本人からすると切実でかなり現実的な状況を反映していると思います。見方を

変えると、まさにインクルーシブ教育システムの一つのかたちではないかと思っています。何人もの特性ある子やこの部分は特に優れているというお子さんたちにも接しましたが、中間教室や自閉症・情緒障害特別支援学級に籍を置きながら、本人と保護者の希望を最大限に受け止めています。例えば、本人が得意とする、国・社・数・理・英は原級の授業を受け、逆に本人がとても苦手とする技能教科は支援学級で授業を受け、本人にとっては良いとこ取りで、傍目には「あまりに自分の都合の良いところばかり取るじゃん」と見えるかもしれないが、その子にとっての良いとこ取りをすることによって、自分はこんなことができる、自分の得意な部分にすごく自信が持てるし、逆に苦手な部分は個別で対応してもらうので、二次障がいにも陥ることもないということを3年間繰り返していく中で、だんだんコミュニケーション能力や人間関係力が身についてきて、私の知っている限りでも高校や大学に進学している子が何人もいます。だから、ある時期はその子にとって、これならできるというところをしっかりと聞き取って、そこだけでも伸ばせるような良いとこ取りの対応をできる限りしていきたいと思っています。ただ、学校にはマンパワーにも限度があります。その学校の場合も、先生方は自分の空き時間もやりくりして、個別対応をかなりねんごろにされていたからできたことです。子どもの実態に応じて学びを変えろとか、学びの場を柔軟に使い分けることがこれからはとても大事です。ここしかないではなく、ここもあるというふうに子どもの多様性に合わせて良い方向を模索し続けることが、これからの学校では必要なことだと思っています。

#### ○林企画部長

ありがとうございました。

目指す姿や当面の取り組む課題を教育委員会から説明をし、その後もう一度意見交換させていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

#### ○麦島係長

資料の14ページになります。今、考えている目指す姿ということで、インクルーシブ教育システムにおいては、将来の共生社会の実現に向けて、障がいのある子どもと障がいのない子どもが同じ場で学ぶことを追求していきますが、それと同時に、その時々の子どもの教育的ニーズに対して最適な場所を連続性のある「多様な学びの場」として準備し、それぞれの学びの場の充実を図っていくことが大切であると考えております。それぞれの学びの場の充実を図ることで、その子の自信、意欲、自尊感情を高め、できることを増やし、場合によっては学びの場の見直しを図り、連続性のある「多様な学びの場」として準備をすることを考えております。その中で特に通常学級における特別支援教育の推進が、これから大切にな

ってくると考えており、学級の中で集団づくりや授業づくりを大切にさせていただくことを考えております。具体的な取組としては、まずは副学籍による交流を大切に捉えていきます。近くに障がいのあるお子さんが暮らしていることを、学校現場から大切に考えていきます。また、共生社会の実現に向けた大人の取組としても大事なものと考えております。

特別支援学級における自立活動等の学びの充実、通常学級における支援の必要な子への対応、支援員の充実、学びの場同士や関係機関との連携等を大切にしていきたいと思っております。その際、個別の教育支援計画や個別の指導計画を立て、連携を図り指導していますが、その中にその子の得意な面、苦手な面も出しながら、得意なことを伸ばし、苦手なことを克服するというかたちで支援や指導をしていただいています。適切な支援につながるためのアセスメントや検査については課題があり、どのような方法が考えられるか情報等を収集して研究していきたいと考えております。

以上になります。よろしくお願いいたします。

#### ○林企画部長

それでは、目指す姿、取組の方向性、当面の課題等を中心にご意見をいただければと思います。まずは教育委員の皆さんからご発言をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

上河内委員、よろしくお願いいたします。

#### ○上河内教育委員

今、説明の中に、副学籍制度により在籍の児童生徒との交流を大事にしていくとありましたが、そういった交流の機会がないと理解できない、分からないことがあると思うので、そういった機会を通して、子どもたちにいろんな人たちがいることを理解できるような機会がとれていくと良いと思います。そしてそれが障がいに限らず、地域の人たちとの交流や、他地域、他県、他国の人との交流、当市でもそういった思いを込めてカンボジアスタディツアーや伊勢市との交流、三遠南信地区との交流などやっていると思いますが、それが将来に活かせるようなインクルーシブな教育になっていくのではないかと思います。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大でなかなか交流ができなかったと思いますが、今、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行された状況で、中3になる子どもも、夏休みには地域に出て小さな子どもたちと接する地域学習をやったり、今日も保育園に行って職場体験をしたり、そういった機会を通して、コロナの時期にはなかったキラキラした目をして「楽しかった」と言って帰ってきました。同年代の同じ仲間たちだけの集団の中で育つのではなく、いろいろな人との交流が子どもたちの育ちにとって大事だと改めて実感しているところ

です。他人に助けられる、他人を信頼し思いやりを持てる子どもたちに育ってもらって、インクルーシブを取り入れるような社会の担い手になっていってほしいと思います。

○林企画部長

ありがとうございます。

野澤委員、お願いいたします。

○野澤教育委員

先ほど北澤委員から、保護者の方が同じクラスみんなに「うちの子どもはこういうふうだよ」と言うことで関係が改善された話がありました。本人の視点は、なかなか反映できないと思います。本当に障がいがある方の本人の視点は、こちらではなかなか斟酌できない難しいことだと思いますが、先ほどのお話の中で「そういうことだよ。だからみんなちょっとお願いね」って、これが子どもさん本人の視点だったと思います。それがみんなで共有できたことで、うまく全体が回っていった感じがします。

私たちは大なり小なり発達に特徴があります。そういうことが表現できるか、できないかの差で、表現ができれば、みんな「あの人はこういう人だな」といってお互いに理解が深まります。自己表現することが困難になってしまっているだけなのではないかと私は捉えていて、教育の中でもそれがうまく自己表現できる場があり、交流としてうまくいけば、インクルーシブはハードルが高くないのではないかという気はしないでもないと思って話を伺っていました。そんなことが今後できることがあれば、少しでも変わっていくのではないかという気がします。

○林企画部長

ありがとうございます。

三浦委員、お願いいたします。

○三浦教育委員

冒頭に市長から教室の秩序を乱す子どもを通常学級から排除しているようなことが耳に入ったという話だったと思います。保護者の方がそう思われたということは事実であろうなと思います。でも、そういったことが実際にあったかという点、保護者の方とそこに関わった教員や様々な人たちとの信頼関係、表情、言動から伝わってくる何かがあるのご発言だと思えば、関わるものとすれば大切なことだと思います。同じ子どもを大切に思う者同士が、その子どものことを第一に考えて、信頼関係を持ちながら、その子どものことを共に考えていく姿勢ができ、その子どもが変化してくる姿を一喜一憂ではないが、うまくいかなかったことは一緒に悲しみ、できたことは共に喜ぶ姿勢が、関わる保護者と先生方、地域の中で

きてくると、保護者の方たちのそういった思いも少し落ち着いて和らいでくると思います。保護者の方たちに精神的な落ち着きがあることが、その子どもさん自体も安定してくる一つのきっかけになると思いながら、お話を聞かせていただきました。

上河内委員から子どもさんが「楽しかった」と言ってキラキラした目をしていたとのお話がありました。これが本当に子どもの姿として目指すべき姿だと思います。できないことに目を向けるよりも、できること、できそうなこと、こうすればというところに目を向けながら、子どもの成長、変化していく姿を保護者の方だけではなく、教育者、地域、周りのお友達たちも一緒に見ることで私たちも成長させてもらえるものがあると思います。

#### ○林企画部長

ありがとうございました。

北澤教育長職務代理者、お願いいたします。

#### ○北澤教育長職務代理者

ここまでどちらかというと、特性のある本人に寄せた立場からだったが、障がいがある子どもない子ども、可能な限り共に学ぶインクルーシブな教育を具現していく点で、心に留めておきたい個人的な思いがあります。私個人としての思いは、特別支援教育の弱い点は、個別支援にかなり注力するあまり、子ども同士の関係をつくっていくところに弱さがある。言い換えると、子ども同士のつながる力を育てるところがもう一歩だと思います。

特別な支援を進めて、合理的な配慮をすることは大事だと思いますが、個々のお子さんを底上げすることだけでは、人と人はつながっていきません。この間、30日にムトスぷらぎで高校生による合同高校説明会が行われました。行ってみたら100名ぐらいの参加があり大盛況でした。その時に見て感じたのは、同世代が及ぼし合う力はすごいということです。大人が何かを企画して、大人目線で子どもを導くという発想ではなく、同世代から子どもたちが学び合うことはすごいと思いました。100名ぐらいの参加者の中学生の感想用紙を後から見させてもらいましたが、「年齢の近い人からアドバイスや学校の様子を気軽に聞けて、とても参考になった」という声がたくさん書かれていました。登校を渋りがちなお子さんたちが最も気にするのも、同世代の視線だと日頃感じています。話を戻すと、障がいや特性がない者が、ある者を受け入れるのではなく、誰もがお互いを受け入れ合うようにするには、同世代の子ども同士がつながることを意図した取組は、すごく大事だと思っています。具体的には、学校やクラスや授業づくりの工夫がとても大きいと思います。そもそも教員同士が多様性を認めて受け入れられる柔軟性をもち続けていきたいということや、助けを求める、人と違うことを大事に受け止められる雰囲気、学びの選択肢、今の時代は静かな教室で静かな授業

ではなくなっていて、子どもたちは授業の中で自由に友達と話し合うような勉強の流れができてきています。そういう中で、子どもの多様性も受け入れられるような授業づくりが進んでいったらと思っています。そういうところをみんなで意識して進めたいと思います。

○林企画部長

ありがとうございました。

教育委員から一巡ご意見いただきました。

教育長、市長、ご発言あればお願いいたします。

教育長、お願いいたします。

○熊谷教育長

今、教育委員の皆さんたちのご発言をお聞きして、上河内委員のおっしゃる交流の機会が本当に大事だと感じました。今までコロナでコミュニケーションや体験はかなり制限されてきました。改めて、その意義や必要性が感じられた中で、先ほどの笑顔がキラキラしたというのは、まさにそれがその子にとってのウェルビーイングな世界ではないかと感じました。体験の場はすごく大事にしていかなければいけないととても感じました。

また、野澤委員から自己表現できるかということは本当にそうだと思います。先ほど申し上げた「五体不満足」の乙武さんは、自分で自分のことを表現できる方で、そのことによって周りが理解していったのだと思います。それがなかなかできないお子さんも多いので、指導の方向性として、大事な視点だと感じた次第です。

また、三浦委員がおっしゃっていただいた、教師と保護者、あるいは子どもたちの信頼関係は、本当に教育の土台であり、それなくして教育が成り立たない部分でもあるので、その子にとってどういう居場所が一番良いのかを共に考えていく上で、その信頼関係が一番大事であると思います。どうやってそれをそういう場面になる前に築いていくかがとても大事だと改めて感じました。

また、北澤委員がおっしゃっていただいたように、確かに特別支援学級では一人一人へ寄せた指導や学習を提供していますが、自立活動や子ども同士、友達同士がどう関わっていけるかをいかにつくっていくかはとても大事な視点であると思います。それぞれのご発言にハッとしました。ありがとうございました。それがまた、今後の方向性にもなると感じているところです。

話は変わりますが、私、テレビを見ていると、最近自閉症の方を主人公にしたドラマが非常に多いと感じます。海外ドラマのアメリカ、韓国、フランス、日本でもそうですが、そういうドラマを見ていると、共通することは、自閉症の方を理解する方と支援する方との2人

が必ずいらっしゃって、そのことによって障がいのある方が社会的に自立したり、活躍していくことが共通していると思います。今までは、担任の先生に合わせて子どもたちが教育をされていく状況で、学校に合わせて子どもたちも先生たちも一緒に学んだり、勉強していく教育だったと思います。しかし、皆さんの思いをお聞きすると、これからは子どもたちに合わせた学級づくりやその子に合わせた学校ということも、もう一つの視点として考えていかなければいけないと感じました。今ある学級や学校の枠だけで何かをしようとしても、なかなか結果には結びついていかないと強く感じました。

一つすごいと思った事例があります。担任の先生が素晴らしかったんですが、特別支援の判断を受けたお子さんに合わせた指導をした結果、テストを自分でつくって、その子が成就感や達成感やできた経験を積む支援をしました。これは手間のかかることで、誰でもできることではありませんが、それを積み重ねていった結果、部活でも活躍ができる一員になり、最終的には就学判断が特別支援判断ではなくなった例があり、本当に驚きました。まさに北澤委員がおっしゃったように、子どもたちは変わるし、成長する。そのためには、理解者、支援者がどういう関わりをするかが、その子の人生にとっても大きいということを感じており、そういう環境をどうやって整えるかがすごく大きな課題であると思います。先生方の研修をどういうふうに工夫ができるかは、事例も含めてとても大事だと感じました。

#### ○林企画部長

ありがとうございました。

続きまして市長、お願いいたします。

#### ○佐藤市長

本日はありがとうございました。冒頭、申し上げたことと本日この場でお話いただいたことにギャップがあったと思います。私の認識よりも学校現場、教育現場で今、行われていることは大分進んでいます。私が何人かの保護者の皆さんから聞いていたことと、今の現場の実態とはおそらく違っていると感じました。今日ここであったような話を、私にそういう話をしてくれた方々にお伝えできれば、その辺りのモヤモヤ感が大分消える気がしました。今日ここでお話されたことは、何らかのかたちで保護者の皆さんや子どもたちに伝えられると良いなと思ったというのが1つの感想です。私が学習障害とか発達障がいという言葉に触れたのは、20年以上前に鳥取県で財政課長をしている時に、教育委員会から予算要求の説明の中で初めて聞きました。そのときに聞いた事例が、トム・クルーズだったので、あまりネガティブなイメージを持っていませんでした。発達に特性のある子どもがいるが、ちゃんとサポートしてあげればその子のそういう面が伸びていく、そのサポート体制をつくるためとい

う話だったところ、近年聞くのが先ほど申し上げた話だったので、その辺のギャップはどうなっているのかというのがあり、冒頭で申し上げました。今日ここでやり取りされたようなお話が、保護者の皆さんや実際に発達障がいのあるご本人に伝わって、それが自分たちの育ち、自分の子どもの育ちにみんながサポートしようとしてくれていて、結果的に、最終的な社会に出て行くところまで大丈夫だというメッセージとして伝われば良いと思いました。そういうところが伝われば、まずは誤解を解消することにもなるでしょうし、これからどうするかという話でも大きな意味での方向性が確認できたと思います。教育委員会でも具体的にどうするか取組を進めていただければと思います。今日はどうもありがとうございました。

---

#### 4 その他

##### ○林企画部長

全体を通して、ご発言あればお願いをします。

野澤委員、お願いいたします。

##### ○野澤教育委員

市長にぜひお願いします。教育現場は非常に非効率であって、経済性という部分が非常に乏しいと理解しているし、そうであってほしいと思っています。個々で対応していくとか、非常に非効率ですが、それをぜひお認めいただきたいと思います。教育は経済性から一番かけ離れたところにあると私は理解しているので、そういうことが遅々として進まない、なかなかうまくいかない部分がたくさんあると思いますが、それをしっかり受け止めていただきたいと思います。

##### ○佐藤市長

何か具体的に引っかかっているところはありますか。

##### ○野澤教育委員

特別支援の先生方を70人希望しているが、今48人しか配置できていない状況です。でも、そのところを少しでも増やしていただくように具体的にできればと思います。先生方の配置を少しでもゆとりのある配置に持っていければありがたいと思っているので、ご尽力いただければと思います。

##### ○林企画部長

北澤教育長職務代理者、お願いいたします。

##### ○北澤教育長職務代理者

問題は発達特性があるお子さんたちが、学校を卒業した後の部分で、特に私が認識してい

る部分は、通信制の高校に在籍しているお子さんたちが一番その後の動静が掴みにくい点です。お家にひきこもっている状態になっている時に、そういう中でも意を決して社会に一步出ようとか、働こうとなった時、具体的な話で関わってくるのは高校卒業の資格があるかということと、特に飯田下伊那で生活していくときに、自動車免許があるかないかが、その後の活動できる範囲を非常に限定してしまうということを、何人かの卒業したお子さんたちを見ていて感じています。例えば、自動車学校と連携して、自動車免許を取るための支援ができると、特性のある皆さんで、学校を卒業する年齢になった皆さんでも、かなり社会に融合していきやすいと考えます。求人情報を見ても、高校卒業の資格を求めていること、活動範囲ということで、自動車免許があるかないかというのは、社会人になってからの活動範囲をかなり限定すると感じていて、具体的にそういうところに何か手立てができると、お互いに住みやすくなるのではないかという思いを持っています。現実的には大事な話だと思っています。

○佐藤市長

車の免許を取るのに、例えば、特性がある子どもたちが、自動車学校に通いづらいという現実があるということですか。

○北澤教育長職務代理者

それはなんとも。ただ、若干時間が余分にかかるということはあるかもしれない。

○林企画部長

終了予定時間を過ぎており、以上とさせていただきます。

非常に貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

---

## 5 閉 会

○林企画部長

それでは、以上をもちまして第1回の総合教育会議を終了とさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

---

閉 会 11時50分